

# 子どもと外出する

津守 真

子どもは、幼児期から児童期、青年期へと、それぞれの時期に、社会との間でぶつかり合いがある。社会の常識に適合するように振る舞うのには相当の年月を必要とするので、保育者はその中間に立って、両方の調節をするのである。そうしている間に、現在とは違う新しい社会がつくられてゆくのだと思う。

ある日、Yくんが自転車に乗り、私も自転車に乗って庭を回っていた。私が一回りして来るとYくんがべそをかいて泣いていた。私がYくんより先頭を走ったからかと思った

が、どうもそうではないらしい。Yくんは自転車で門から外に出たかった。私は自転車で外にいかれないこと、外に行くときには靴を履いていくことを言うと、彼は急いで自分の外靴をはきにいった。

私は子ども達にできるだけ学校の中で過ごしてもらいたいと思う。しかし子どもによってある時期どうしても外に行かないではいられない場合がある。それぞれに後から考える理由があるのだが、その時にはためらう。これまでも何人もそういう子どもがいた。ある子どもは数週間で終わるが、子どもによってはもっと長い期間を必要とする場合もある。だれか職員がついて行ける時にはいいが、そうできない時は仕様がなない。

この日、Yくんは門の鍵を片手で簡単にあけてしまった。傍らにいた私は急いで追いかけないわけにはいかなかった。

## 走る

Yくんは一目散に走った。隣の公園をかけ抜けた。私が手をつなごうとすると大声を出す。この子が走るの、つかまえられるためのように思われた。実際、この後、Yくんは私と一緒に目的の場所にいかれると分かると、走らないで歩いて行くようになった。Yくんが外に出たのはこの日が最初だったので、どこに行くのかも分からず、ひたすら後を追いかけるよりほかなかった。私は横断歩道で追いついた。

## スーパーマーケット

Yくんは、横断歩道の真ん前にあるスーパーに走り込んだ。あちこち走って見て回る。最初、私は子どもと一緒に走ったが、大人が走ると目立つことに気が付き、ただのお客になって歩いた。何度も店内を見て回りながら、私は一年前に長女の一家が私の家に泊まっていた時、三歳の孫をつれてスーパーに買い物にいった妻の話を思い出した。三歳の幼児は店内を走り回り、棚の上のものを片端から取ろうとした。私の妻は最初は仰天し、とめていたが、子どもはますます目茶苦茶に行動した。都心から遠い郊外に住んでいるこの子は、それまでスーパーにいった経験があまりなかったようだ。それでこんなに沢山の食物が並べてあるのを見て、どうしたらいいか分からなかったのだろう。妻は、この子が取ったものは全部買ってやろうと思い、自分の買い物はしないで帰って来た。この日の夕方私がか家に帰ると妻は心身ともに疲れきっていた。次の日には妻は、現代の無制限の物に囲まれた環境の中で人の欲望に対する処し方を知るためには、子どもが自分で選択して取るのを絶対に止めるまいと思つて、一万円札を何枚も持って行った。しかし実際には一、三五〇円しか使わなかった。なんだか拍子抜けして帰って来て、それからは安心してスーパーに行くようになった。そして、「このあいだ買ったふりかけはいい味じゃなかった」とか、「(キャラクターつきの)子どもカレーよりもお母さんのカレーの方がおいしかった」などと会話をしながら買い物に行くようになった。それから一年以上たったいまでも、この

子は私の家になると、まずスーパーにいった私の妻に何でも買ってもらうのを楽しみにしている。そうすると、お父さんにはお煎餅、妹にはミニーちゃんの絵のついたホットケーキの素と、他人に対する配慮をしながら自分の好きなものを買ってくる。

### 自分の選択

その日、スーパーマーケットで、Yくんはいくつか手にとつて見たがじきにもとに戻し、最後に、生パスタとポテトチップスをとった。自分で選択していることは明らかである。生パスタは冷凍食品の棚の一番上にあつたのを、私に抱いてくれと要求して取つたのだった。私は財布も持っていないし、困つたなと思つたが、ちよつと手をふれるだけで大声を出すので、とめられなかった。レジでお金をもつて来なかつたことを告げ、十五分程で戻ってくるからと言い、レジの人はためらつたが承知してくれた。

Yくんは公園に走り、ブランコをひとしきりやつた。その間に私は、私だけがお金を返しにくるというのではなくて、子どもも一緒に同じ経験をするのがいいと考え、学校に財布を取りに行つて、またスーパーにお金を払いに来ようと言つた。するとYくんは「サイフ、サイフ」と言つて、一直線に学校に戻つた。そしてまた一目散に千円札を持ってスーパーに走つて行き、レジでYくんの手で支払いを済ませた。こうして最初私は子どももの意図が分からずに一緒に走つたのだったが、これで外出の一連の行動が完結し、私も満足感

を感じたし、子どももそれで納得した。また、スーパーのレジの店員さんも私共に対して寛容だったことを有り難く思った。こうして学校に帰った来た時の子どもの顔がとても良かったと皆に言われた。この日、Yくんは四時過ぎまで遊んで帰った。

## 翌日

次の日、母親はくるなり私に報告してくれた。前日、家に帰るとすぐに生パスタを手提げから出して母親に作らせたという。そしてポテトチップスは封も切らずに大切に枕元に置いて寝て、また手提げに入れて学校に持って来た。私は昨日の経験がYくんにとって大切なものとして心に残ったことを知り、嬉しかった。この日Yくんはしょっちゅう私の後ろについて歩いていった。

## リュックサック

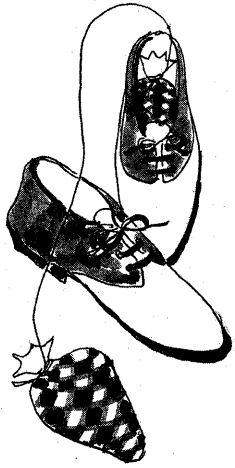
Yくんは昨年の八月号に「荷物」という題で記したYくんのことである。丁度この少し前から、一年以上も背中から降ろしたことがなかったリュックサックを、遊んでいる最中に降ろしているようになっていた。昨日はそのリュックを学校においていった。何かよく分からないが肩の荷がおりた気持ちになった時、この子はもっと自由になって外に関心が向いて来たのではないだろうか。これからはしばしば外出するようになったが、当然のこと

ながら、それに伴って、外の社会との間で葛藤を生じる機会も多くなっている。それについては別の機会に記すことにしよう。

### 同窓会で

Yくんは五歳である。いま幼児の時に経験していることを、中学、高校にあって初めて経験することになったら、その困難はもっと大きいだろう。

先日同窓会の時に来たMさんの母親が言うには、中学校で買い物に行くのに、言葉で表



現しないこの子は卵の絵をかいたカードを持って行かせられる。スーパーでそれを見てから買い物をする練習をしているという。それには先生としての意図があるのだろうか、この子はすでに実物で分かっているから、カードの必要はないし、この子は信頼されていないように思うのだろう。この子はスーパーに買い物に行く授業に興味を持たない。皆がもっと早い時期に経験しておけばいいのにと母親は言う。

いま区立の養護学校高等部にいつているOくんは、小学校の高学年の時よく職員と外出して日本橋や兜町の銀行や証券会社でパンフレットをもらってくるのを好んだ。母親が言うには、近頃、夜になって一人で外出するので目が離せない。いろいろ話を聞いてみると本人には何か行きたい所があるようなのだが、それが学校の先生に分かってもらえず、家に帰ってからすきを見て飛び出してしまうらしい。久しぶりで同窓会に来た時に、もとの担任のNさんと地下室に行った。何かを探しているようで落ち着かず行動が目茶目茶になってしまいが、しばらく静かに一緒にいるうちに新聞紙を探していたことが分かった。それを持って教室に行つて、興味のある広告の部分を取り抜く。そうしているうちにいつものOくん自身を取り戻した。夜になって外に飛び出す時にも本人の心にはこんな風な混乱があるのだろう。一緒について来た中学生の妹にきくと、昨晚も二時間くらい見つからなくなつて、家中で探しに行つたのだという。私が、それは大変だったねと言うと、「いいえ、きょうだいですから」と言つて笑つた。家族が皆でこの子をめぐつて、どんな

時にも力を合わせて生きるのをあたりまえにしている姿がたくましく明るく思えた。

子どもが成長するにつれて次第に外出の機会が多くなる時、社会と摩擦を起こす機会も増す。その時に、これは文化社会のなかのできごとなのだから、私共はその現実に当面すること、文化的なかかわりを求められているのだと思う。力づくで大人の常識に従わせることをしてはならない。文化的というのは人間的と言い換えてよい。つまり互いに対等の人間関係に立ってかかわること、相手の目でものを見て、自分の見方を変えること、本人が選択することを尊重し、現実の社会の中でそれを可能にする仕方を考えること、互いの生命性が生きること。そして、それによって社会全体が生命性を回復するように。

「万人のための教育」から「万人のための社会」へという世界規模での理念の変革は、困惑や痛みが伴わないではなしえられないだろう。

(愛育養護学校)